山頭火ふるさと館報
第８号
令和４年４月

「山頭火生誕一四〇年、ふるさと館開館五周年」を迎えて

一般社団法人防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
館長　中村浩典

山頭火は、桜の季節への移ろいを「さくらさくらさくさくらちるさくら」と詠んでいます。今まさに防府天満宮の桜も花盛りを迎え、春爛漫の季節が訪れておりますが、皆様にはますますご清祥にてお過ごしのことと拝察申し上げます。

昨年四月、当館館長に就任し、早いもので一年が過ぎました。私にとって文学館での業務は初めての経験であり、戸惑いや試行錯誤の連続でしたが、何とかこの一年、運営に携わることができましたのも、平素から山頭火ふるさと館を温かくご支援いただいている関係者の皆様や山頭火ファンの方々のおかげであり、衷心より感謝申し上げます。

昨年度は、新型コロナウイルス感染防止対策として、二度の臨時休館に加え、緊急事態宣言区域やまん延防止等重点措置区域からの来館自粛をお願いするなど、皆様方には大変ご迷惑をおかけしましたことを心からお詫び申し上げます。一日も早くいつもの日常が再来し、通常どおりの活動を展開できることを心から願っております。

さて、今年は「山頭火生誕一四〇年」、「山頭火ふるさと館開館五周年」という節目の年を迎えております。職員一同、この節目の年を躍進の年ととらえ、当館のさらなる発展・充実に向け、展示活動や教育普及活動をはじめ、各種事業の質的向上を図ってまいります。

秋には周年記念企画として、山頭火の尊敬した先人である芭蕉、良寛の貴重な資料を交えた特別企画展を開催いたします。また、これに併せて記念講演会＆句会、また関連イベントとして句碑をめぐるシールラリーや各種ワークショップなど、多彩な行事・イベントを計画しておりますので、ぜひとも足を運んでいただきますようお願いいたします。

話は変わりますが、現在、当館は山頭火やその句の魅力をいかに若い年齢層の人たちに伝え、理解してもらうかということを重点課題の一つとして運営を進めております。まだ全国的に知られていなかった自由律俳人種田山頭火の知名度を高めるために、今日まで熱心に顕彰・継承活動に尽力されてきた方々の年齢は徐々に高くなってきています。これを受け継ぐ若い世代の人材をこれからいかに育んでいくかということは私どもの責務といえます。この課題解決のためにも、出前授業や校外学習、地域連携学習の受け入れ等の学校連携、また子ども対象の講座やワークショップ等の開催、さらには自由律俳句や書道コンクールなどの実施を通じて種田山頭火への興味関心を高めていきたいと考えます。

結びに、今後とも山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

山頭火句碑
「さくらさくらさくさくらちるさくら」
（防府市・人丸水源地）

目次

館長挨拶　……　２
企画展「山頭火に出会った人々」……　３
「生誕１００年記念　秋山巌原画展
　拝啓山頭火さま」……　３
寄稿（町田珠実様）……　４
トークショー「秋山巌とほうふ」……　４
第三回フォトコンテスト　……　５
「山頭火と９月１日」……　５
第四回自由律俳句大会　……　６
句碑拓本ワークショップ　……　６
山頭火カルタで書き初め大会　……　７
資料受け入れ報告　……　７
今後の企画展情報　……　８
収蔵資料紹介　……　８
今月の一句アーカイブ　……　８

企画展「山頭火と出会った人々」

開催期間
令和三年七月二日(金)～十月十七日(日)

自由律俳人・種田山頭火には多くの友人がいました。その中でも、比較的晩年の山頭火と交流のあった四人の友人たちの作品や資料を紹介しました。お互いをどのように思い、どのような影響を受け合ったのか。山頭火に惹かれた人々の目線を通して山頭火とその作品の魅力を探りました。

山頭火没後に作品等をまとめ、山頭火が広まる下地を作った大山澄太、最晩年の山頭火を松山で支えた高橋一洵、山頭火が湯田温泉に住んでいた時期に交流があり、山口県の郷土文学研究者として山頭火について客観的に調査した和田健、自由律俳人で山頭火の弟子とも言われる近木圭之介の四人を紹介しました。

展示資料
【短冊】坐しては観る山のむこうの山(大山澄太)、【短冊】この道しかない一人であるく(大山澄太)、『大耕』第十九巻第十号(大耕舎・昭和四十年十月)、『愚を守る　山頭火遺稿』(大山澄太・東京堂出版・昭和十六年八月)、『層雲』第三十巻第八号(層雲社・昭和十五年十二月)、【掛軸】おたたも或る日は来てくれる山の秋ふかく(種田山頭火・高橋一洵)、『和田健詩集』(和田健・こだま詩社・昭和二十八年十一月)、【色紙】風来居(和田健)、【原稿】「風来居春秋―山頭火日記考―(3)」(和田健)、『近木圭之介句抄』(近木圭之介・層雲社事業部・昭和六十一年三月)、【短冊】うしろ姿のしぐれてゆくか　山頭火句(近木圭之介)、【掛軸】山頭火を慕う　振りむいて地平線を誰ですか(近木圭之介)、【短冊】らんぷが家の中につき彼が心中にある煩悩(近木黎々火)、【原稿】「山頭火・折々の句」(近木圭之介)、【屏風】山頭火句・圭之介句(近木圭之介)

「生誕１００年記念　秋山巌原画展　拝啓山頭火さま」

開催期間
前期　令和三年十月二十二日(金)
　　～令和四年一月十二日(水)
後期　令和四年一月十五日(土)～
　　三月十三日(日)

版画家・秋山巌は、山頭火を題材とした作品を多く残しました。このたびは、秋山巌の生誕一〇〇年を記念して、版画の下絵として描かれた原画を、版画や肉筆画、山頭火の直筆資料等とともに一挙公開し、秋山巌によって表現された山頭火の句の世界をお楽しみいただきました。

原画の展示は十四点、肉筆画は十二点、版画は四点、山頭火の直筆は五点(レプリカ含む)展示しました。

なお、企画展の開催に当たり、以下の方々にご協力いただきました。慎んで謝意を表します。(敬称略)

秋山巌の小さな美術館　ギャラリーMami
　町田珠実
秋山庄太郎写真芸術館
護国寺　橋本隆道

展示資料[凡例：●通期展示　○前期のみ展示　◎後期のみ展示]
●【版画】青い山(秋山巌・当館蔵)、○【肉筆画】分け入っても青い山(秋山巌・護国寺蔵)、◎【掛軸】分け入っても分け入っても青い山(種田山頭火・当館蔵)、●護国寺宛て書簡(秋山巌・2012年9月・護国寺蔵)、○【原画】山のふかさはみな芽吹く(秋山巌・護国寺蔵)三点、◎【原画】椿のおちる水のながれる(秋山巌・護国寺蔵)、◎【原画】濁れる水の流れつつ澄む(秋山巌・2001年2月・護国寺蔵)、◎【短冊】濁れる水の流れつゝ澄む(種田山頭火・レプリカ・当館蔵)、○【原画】さてどちらへ行こう風が吹く(秋山巌・護国寺蔵)、○【肉筆画】この道しかない春の雪ふる(秋山巌・護国寺蔵)、○【肉筆画】春の雪(秋山巌・1999年・当館蔵)、○【版画】この道しかない(秋山巌・1990年・護国寺蔵)、○【肉筆画】この旅果てもない旅のつくつくぼうし(秋山巌・2003年・当館蔵)、◎【肉筆画】雑草(秋山巌・2012年・護国寺蔵)、◎【原画】やっぱり一人がよろしい雑草(秋山巌・2000年11月・護国寺蔵)、◎【原画】炎天をいただいて乞ひあるく(秋山巌・護国寺蔵)、【原画】炎天をいただいて乞ひあるく(秋山巌・2000年・護国寺蔵)三点、◎【肉筆画】炎天を(秋山巌・2008年・護国寺蔵)、◎【短冊額装】炎天をいたゞいて乞ひあるく(種田山頭火・当館蔵)、○【肉筆画】すなおに咲いて(秋山巌・2003年・護国寺蔵)、○【肉筆画】あめあがり(秋山巌・1994年・当館蔵)、○【版画】窓いっぱいの(秋山巌・1979年・護国寺蔵)、◎【色紙】鉄鉢の中へも霰(秋山巌・1985年12月・護国寺蔵)、◎【短冊】鉄鉢の中へも霰(種田山頭火・当館蔵)、◎【掛軸】松は皆枝垂れて南無観世音(秋山巌・1985年・個人蔵)、○【原画】生死の中の雪ふりしきる(秋山巌・2000年11月・護国寺蔵)、○【原画】生死の中の雪ふりしきる(秋山巌・護国寺蔵)二点、○【肉筆画】生死の中の雪ふりしきる(秋山巌・1994年・当館蔵)、○【版画】雪ふりしきる(秋山巌・1990年・護国寺蔵)、◎【色紙】木の葉ふる(秋山巌・当館蔵)、◎【色紙】ほろほろ酔ふて木の葉ふる(秋山巌・1985年1月・護国寺蔵)、◎【扇子軸装】ほろ／＼酔うて木の葉ふる(種田山頭火・当館蔵)

寄稿
拝啓　山頭火さま
秋山巌原画展開催に感謝

秋山巌の小さな美術館　ギャラリーMami
町田　珠実

はじめまして。

版画家　秋山巌の長女、町田珠実と申します。

このたびは、秋山巌生誕一〇〇年記念として山頭火ふるさと館での企画展ありがとうございました。

父が、旅先で【草木塔】と出会ったのは一九七一年、五十歳の時です。まだ小学生だった私は、山頭火に魅せられのめり込み、足跡を辿り版画に表現するために取材旅行をしていた父を覚えていませんでした。

今回の企画展で、防府での秋山巌を知る事が出来、とても嬉しく思うと同時に、山頭火さまが繋ぐご縁の広がりと深遠さに感激致しました。

原画展での作品は、父が亡くなる二年前の二〇一二年山頭火生誕一三〇年の時に寄贈したものが中心でした。

その時の、護国寺橋本隆道ご住職に宛てた手紙が展示されていて、

「ふり返ってみると、防府へもよくお邪魔して浴びるほど痛飲した若い日々を思い出します。・・・」と書かれ、「皆さんともお逢いしたいですが、よろしくお伝え下さいませ」と結ばれていました。

当時、療養中の父から電話を貰い、父の代わりに会場に駆けつけたのを思い出します。

・分け入っても分け入っても青い山
・やまのふかさはみな芽吹く
・この道しかない春の雪ふる

同じ句で、さまざまな構図の原画、作品に合わせた山頭火さまの短冊など、限られたスペースに、よく考えて工夫された展示の様子は、山頭火ふるさと館の皆様の山頭火愛をひしひしと感じました。

山頭火がライフワークとなった父は、八歳の時に母を亡くしています。十歳の時に母を亡くした山頭火と、より深く通じる想いがあったのではないかと、作品を通して感じます。

企画展にご来場下さった方々からも、なかなか見ることが出来ない原画がとても興味深く面白かったと、感想いただきました。

トークショーでご一緒した護国寺橋本ご住職に秋山巌の山頭火シリーズが全国に広がるきっかけとなった曹洞宗ポスター「生死の中の雪ふりしきる」の実物を見せていただきました。

この作品は、岩手県遠野の雪山で、吹雪の中あやうく遭難しそうになった時の実体験がきっかけで創作されました。

山頭火句、一つ一つに向き合い創作された作品を秋山巌生誕一〇〇年の昨年から、山頭火生誕一四〇年の今年、山頭火ふるさと館にて展示・ご紹介出来ました事心より感謝いたします。

ご来場下さった皆様、展示にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

トークショー
「秋山巌とほうふ」

開催日時　令和三年十二月四日(土)
登壇者　町田珠実さん(秋山巌ご長女)
橋本隆道さん(護国寺住職)

「生誕１００年記念　秋山巌原画展　拝啓山頭火さま」の関連イベントとして、秋山巌本人をよく知るお二人をお招きして貴重なお話を伺いました。当日はYouTubeにて生配信もいたしました。

ご長女の町田さんからは、「秋山巌と山頭火」と題し、秋山巌の人生を辿りながら山頭火になぜこれほどのめり込んだのかよく分かるお話をしていただきました。護国寺ご住職の橋本さんからは、「秋山巌と防府」と題して、秋山巌が防府を訪ねたときのエピソードを語っていただきました。

秋山巌の人となりや秋山巌と山頭火の共通点など、お二人だからこそ語ることのできた話ばかりで、大変貴重な時間となりました。

第三回山頭火ふるさと館フォトコンテスト

募集期間　令和三年六月十六日(水)～九月三十日(木)

審査員　鰐石洋己・入江孝治・櫻井宏明・中村浩典(敬称略)

表彰式　令和三年十一月七日(日)

展示　令和三年十一月八日(月)～令和四年一月八日(土)

昨年度に引き続きフォトコンテストを開催し、山頭火の句をテーマにした写真作品を募集しました。県内外からプリント部門五十九点、メール部門十四点の応募があり、その中からプリント部門十一点、メール部門五点が受賞及び入選しました。また、審査後の十一月七日に表彰式を開催し、翌日から受賞作品の展示を行いました。現在受賞作品は当館ホームページの企画展・イベント欄に掲載しています。

受賞結果は次のとおりです。

プリント部門

【最優秀賞】
大脇　雅志(岡山県)
「いつも一人で赤とんぼ」

【優秀賞】
角田　誠(山口県)
「大地にすわるすゝきのひかり」
河野　孝文(山口県)
「青葉の奥へなほ小径があつて墓」

【佳作】
藤井　恵子(山口県)
「お地蔵さんもあたたかい涎かけ」
来栖　旬男(山口県)
「草はうつくしい枯れざま」
広田　和夫(山口県)
「旅はいつしか秋めく山に霧のかかるさへ」

【入選】
冨田　虎次郎(山口県)
「水音のたえずして御仏とあり」
内山　えいじ(山口県)
「鴉啼いて私も一人」
橘　千加(山口県)
「あすはよいたよりがあらう夕焼ける」
久光　美保子(山口県)
「ぬくうてあるけば椿ぽたぽた」
横川　光成(山口県)
「水をへだてて茂りあひ囁きあへる樹樹」

表彰式の様子

メール部門

【最優秀賞】
土屋　恵理(三重県)
「こうしてここにわたくしのかげ」

【優秀賞】
亀池　浩行(山口県)
「ふるさとの水をのみ水をあび」

【佳作】
三戸　律子(山口県)
「お地蔵さんもあたたかい涎かけ」

【入選】
堀　将大(岡山県)
「腹がいたいみんみん蝉」
近藤　博明(広島県)
「さくら咲いて、なるほど日本の春で」

共同展示 3.11文学館からのメッセージ「山頭火と9月1日」

開催期間　令和四年一月十五日(土)～三月十三日(日)

全国文学館協議会の第十回共同展示として、当館では「山頭火と9月1日」を常設展示室にて開催しました。

種田山頭火は大正八年に単身上京し、関東大震災に遭っています。今回は、後年の日記から九月一日の項を取り上げ、関東大震災をどのように振り返っているのか、大震災が山頭火の人生にどのような影響を与えたのか紹介しました。

第四回山頭火ふるさと館 自由律俳句大会

募集期間
令和三年五月一日(土)～十二月一日(水)

審査員(敬称略)
富永鳩山(群妙主宰)
久光良一(自由律俳人)
門田美和子(自由律俳句講師)
中村浩典(当館館長)

※表彰式は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止いたしました。

今回は全国から一般の部に一八一〇点、子どもの部に六六二点の応募があり、そのうち十四点が受賞、九十五点が入選となりました。

受賞作品は以下のとおりです。なお、入選作品は当館ウェブサイトに掲載しています。

一般の部

【最優秀賞】
汗の染み込んだ襷を受けとる　埼玉県　町田　瑞生

【防府市長賞】
いま時を刻みはじめたあなたという時計　東京都　葉月

【優秀賞】
自在鉤ゆらり訛りで手をあぶる　山口県　河野　京

【佳作】
人の群れ避けて靴ひも結ぶ私　埼玉県　石田　隆翔
福は内春に嫁ぐ子の声冴えわたる　東京都　新濃　健
振り向けない背中に孤独が棲んでいる　山口県　田中　流転
明るいほうへドアを開けてくれないか　新潟県　田辺まさゆき
ふりむけばふりむいている私がみえる　埼玉県　中野　照夫

子どもの部

【最優秀賞】
お米がついたあたたかい母の手　三重県　中3　酒井姫依利

【防府市教育長賞】
たたみのにおい木のにおい幸せなにおい　山口県　小5　藤井　彩恵

【優秀賞】
何も書いていないノートおだやかな昼下がり　山口県　中1　山根紗代子

【佳作】
何もないそれが幸せ　山口県　小6　河野　悠希
小鳥のなき声ひとり聞くおるすばん　山口県　小4　髙杉　獅志
あと一歩あと一歩ゴール目指してあがる息　山口県　中2　福田　彩乃

句碑拓本ワークショップ

開催日　十一月二十一日(日)
講師　水落龍勝さん(筑紫拓本研究会会長)

今年度最初の企画展「全国津々浦々　山頭火の句碑をめぐる」の関連イベントとして六月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け延長となり、十一月の開催となりました。拓本とは、石等に彫られた文字や模様を、墨を使って紙に写し取ることです。拓本は中国で生まれた技術で、もともとは書の練習のために、石等に彫られた美しい文字を採っていました。

今回は、
「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」
「へうへうとして水を味ふ」
「おたたも或る日は来てくれる山の秋ふかく」
の山頭火句の句碑と、
「山あれば山を観る…」
の一節を彫った碑を使いました。これら山頭火の直筆をもとに彫られた句碑で拓本に挑戦しました。

山頭火カルタで書き初め大会

開催日　令和四年一月八日(土)
作品展示　令和四年一月八日(土)
～二月十二日(土)

市内の小学生を中心に、九名の方が参加されました。

今年は大判の「山頭火いろはカルタ」と、防府商工高等学校の生徒が作成した「山頭火カルタ」の二種類で遊んでいただきました。その後、取り札の中から気に入った句を選び、短冊に書き初めをしていただきました。お正月らしい遊びをしながら山頭火に親しんでいただけたのではないでしょうか。短冊は、気に入った理由も添えて市民ギャラリーに展示をしました。

大判の「山頭火いろはカルタ」で遊んでいます

資料受け入れ報告

令和三年九月から令和四年一月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

岩本武久様より『定本　山頭火全集　第一～七巻』(種田山頭火)他十八点、小林雅昭様より『秋山巌版画集　山頭火』(秋山巌)十点、春陽堂書店様より『新編　山頭火全集　第三巻・第四巻』(種田山頭火)、田村悌夫様より『大正時代　高瀬懐古図』(山田邦生)【短冊】『種田山頭火戒名「解脱院山頭耕畝上座」』(富永鳩山書)他三十三点、好村逸雄様より【版画　額装】『ここにおちつき草萌ゆる』『大楠の枝から枝へ青嵐』(秋山巌)

御著編書

NPO法人まつやま山頭火倶楽部様『草木塔【復刻版】』(種田山頭火)、國本悦郎氏『句抄覚え書き(句会プリント別冊(三十八))』、公益社団法人俳人協会様『俳人協会作品集[第三集]』他五点、「青穂」事務室様『青穂』四十二号、富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』第三十一号、藤津滋生氏『拝啓　種田山頭火さま　百のキーワードで読み解く』、水落龍勝氏【拓本額装】『うまれた家はあとかたもないほうたる』他二点

誌面の都合上すべてを掲載できませんが、この他多くの図書・資料を寄贈いただきました。ありがとうございました。

今後の企画展情報

企画展「山頭火と衣食住」

前期:令和四年三月十八日～六月十二日
後期:令和四年六月十七日～八月二十八日

旅する俳人として有名な種田山頭火は、どのような身支度で過ごし、どのような食生活をしていたのか。庵ではどのような暮らしをしていたのか。前期は「衣・食」、後期は「住」に焦点を当て、生活する一人の人間としての山頭火を、句や日記等からご紹介します。

種田山頭火生誕一四〇年・山頭火ふるさと館開館五周年記念特別企画展「山頭火と芭蕉・良寛～尊敬した先人たち～」

前期:令和四年九月四日～十月二日
後期:令和四年十月七日～十二月五日

漂泊の俳人として影響を受け、句も愛読していた松尾芭蕉や、禅僧かつ俳人として意識していた良寛等を取り上げ、その俳句や生き方から山頭火がどのように影響を受けていたのか、貴重な直筆の資料とともに紹介します。

収蔵資料紹介

【句会資料「菊」】

凡例

一、漢字の旧字体は新字体に改めた。

二、ページ区切りは｜で表した。

1文豪祭り渡り果実など菊日和　芦
2艇庫ほとり貝塚や小菊めぐらして　蘆ノほ。。
3浜社廃るまゝ野菊伸び垂れて　正。。
4芝居興行の菊日和稲田刈る半ば　正。
5菊畑に旭さす井端水浴びて
6金魚見て鋏研ぐ菊は鉢植えに　石。
7朝焼けの雲脚疾き菊に添ゆる竹　巌。
8洪水ありし洲崎町菊の這ひ花が　巌。。
9菊屋飾る石並めば蔦に虫音栖む　青
10菊手入朝露に樺の松透く日　青。
11変形時計を見寄りす菊花澄みてあり　指月
12菊見来し其人々を案内せり　指｜
13。普請小物が朗ら竹割る菊晴れて　黒舩子
14。。菊に長尻な客去て雨の衝ける庭　黒舩子
15。家の影なす菊畑猫がねろうもの　不泣子
16。。。背山赭に眞っ日して菊の畑広き　不泣子
17菊の郷家々筧水を取る
18株を吐く清水の里菊緑り滴る（ミヅタ）
19。。花草かほど庭統ぶる菊の雨明り　山頭火
20。。道すがら菊も観つ訪へば君あらぬ　山頭火
21駅内の菊畑君を送り来て　碧松
22。蚊帳も干して菊まだき園を築きかふ日　碧松
23知県巡視菊に賞得し闘牛のあり　芦の穂
24墳墓新たに増す墓場菊も立て捨てゝ　正楓｜
25君恋えば笛とめて菊に唄ふとき　石英
26味噌搗きし杵洗ふ良き娘菊晴るゝ　巌。
27縁日更くるに菊値踏み居り捨売を猶
28菊植替ゆ日露帯べる藻焼く煙来る　青葩
29公務余暇を培養す菊も楽しみて　指
30休暇午后を菊いじり講話誘はるゝ　黒舩子。。
31峡の小駅の菊晴れて急行列車過ぐ　不泣子
32敢て貴賓歓待せず菊の畑晴るゝ
33庭三歩菊一株の主かな
34菊畑の白らけ小家牡蠣灰など焼けるにや
35本伏せて手洗ひぬ菊花壇めぐる水　山。
36厩辺の菊畑や茄子も濃き咲けり　碧松。｜
37庭に蒔きしもの芽赤か菊も霧晴れに　碧。
38菊に来る蝶真っ昼田刈り留守にゐて　碧。
39菊茶屋は鎖しあり墳井溢れゐて　山頭火。。。
40暴風朝を児ら拾ふもの菊畑に　山頭火。（シケ）
41飛び〳〵に鶏舎大袈裟な畑白菊が　蓮の門
42茱畑にも一区画菊作るもの
43菊の亭岸下に浪打ち寄する
44鉢二三捨て置けり菊畑の雨　不泣。
45湯屋の煙影なせり鉢菊の椽　不泣子。
46造船余材狼藉積めり磯菊に　黒舩子。。。。
47菊寺の飯拆や稲田こぼれ鳥　黒。
48菊主が好事に教授茶事大部　指｜
49投げさしの水不足など菊垂れて　指月。
50日傘連れと七社廻り菊園植替えつ　青葩
51登庁今日も琵琶ならす堤の白菊に　青葩。
52朝露を切る菊や茄子畑土龍鼠もつ（ムグロ）　岩。
53別れ近きを何知らぬ菊の咲き驕り　巌
54油虫を追ふ句座や菊に君名残り　石英
55祭旗ほの見ゆ午砲鳴り菊の畑晴るゝ　石英。
56水源地ほとり野菊茨も咲き満ちて　正楓
57堀塗り代ふに菊鉢照る塲片寄せつ　正楓
58菊に訪へる幼きが足袋懐に　芦。
59菊に鉢仮病を日向だるやうな　芦

（採点表　省略）

解説

明治末から大正初期、山頭火は防府を中心とした俳句結社「椋鳥会」に所属していた。紹介した資料は兼題を「菊」とする句会の際の資料で、大正二年十一月頃のものと考えられる。事前に十二名が句を提出し、句会当日は九名が集まっている。

この句会から、『層雲』大正三年一月号の俳句会報欄に「不泣子入営送別句会（周防国防府）」として何句か選ばれているが、不泣子の送別句会と題された句会資料は別にある。それには大正二年十一月二十二日の日付と、「於星浦居」の文字があり、出席者は句会資料「菊」とは異なる。そのため、「菊」の句会も不泣子送別句会だったとすると、送別句会は少なくとも二度、開催されたと考えられる。

このたび紹介した句会資料「菊」の作者および選者は次のとおり。

徳山（現周南市）の河村黒舩子・麻郷村（現田布施町）の江良碧松（田布施の結社「一夜会」の中心人物。戦後は山口県文化功労賞を受賞している。）・蘆の穂（不明。岩国の人か。）・麻郷村の長野巌陽洞（一夜会メンバー）・麻郷村の地家青葩光（一夜会メンバー）・種田山頭火（当時は大道で種田酒造場を経営していた。）・防府の斎藤鐘眠・防府の梅田蓮の門・防府の浴永不泣子・岩国の松金指月堂（後年も山頭火と交流があった。）・麻郷村の冨永石英・麻里布村（現田布施町）の岩金正楓。

省略した採点表では、句の上下に付された〇印を集計している。黒舩子が十点と最多得点で、次いで山頭火が九点、不泣子六点、巌陽洞五点、碧松四点という順であった。

防府から岩国までのメンバーが投句しており、このときの句会は、防府の椋鳥会、麻郷の一夜会、岩国の句会など、結社を跨いだ句会だったのではないかと推測できる。

（当館学芸員　髙張優子）

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和三年
十月　ゆふ空から柚子の一つをもらふ
昭和七年

昭和七年十月十二日の日記の句を推敲して第二句集『草木塔』に掲載したのがこの句で、柚子を空から「もぎとる」と詠んでいたのを、「もらふ」と直しています。もともとは夕空の、自然のものだった柚子を、その馴染んでいた夕空から一つだけいただく、という解釈ができるでしょう。山頭火の自然に対する敬意や感謝の気持ちが伺えます。

十一月
あなもたいなや　お手手のお米こぼれます
昭和十四年

四国遍路の途上、十一月十日、現在の高知県香南市付近の沿岸を歩いていた日に詠まれたものです。前書きに「行乞即事」とあり、行乞の様子をそのまま表した句、ということになります。特に句の前半を見てみると、「あな」は古語の感嘆詞、「もたいなや」の「や」は詠嘆を表す助詞であり、「ああ、もったいないなあ」と手からこぼれんばかりのお米をいただいたことへの感謝の気持ちが、大袈裟にも思える言い回しで表現されています。

十二月
悔いるこころに日がてり小鳥きてなくか
昭和九年

昭和九年十二月三日に詠まれた句です。山頭火の日記を読んでいくと、日々さまざまなことを後悔したり、これでいいのだろうかと自問自答したりしていることがわかります。そのようなときに、日があたたかく照り、そして小鳥の軽やかな鳴き声が聞こえてきて、沈んだ心をゆっくりと解してくれているようだ、と詠んでいるのが掲句です。

令和四年
一月　寝ざめしん〳〵雪ふりしきる
昭和八年

昭和八年一月、小郡の其中庵にて詠んだ句です。日記を読むとこの日は、朝目が覚めると雪が降り積もっていたということが分かります。「しんしん」という言葉は、身にしみる寒さを味わっている様子を表しています。同時に五感を研ぎ澄まして感じ取った雪の朝の空気を、「しんしん」という言葉で的確に表現した、寝覚の床での一句です。

二月　足音は郵便やさんで春めいた雨
昭和八年

昭和八年二月八日、其中庵での句です。山頭火は全国各地の俳句仲間に宛てて頻繁に手紙を書いており、彼等からの返事をいつも心待ちにしていました。便りが来ることを知らせてくれる足音と、もう春が来たのかと喜ばせてくれるようなあたたかい雨、これらへの期待感が重なり合って膨らんでいくような印象を与えている句です。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間
午前十時～午後六時
（ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで）

休館日
毎週火曜日（祝日の場合は次の平日）
十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料
無料
※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス
防府駅てんじんぐちから約一・五km
まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m
山陽自動車道防府東・西ＩＣより約七分

駐車場
普通車用三台、身障者等用二台（ふるさと館横）
無料観光駐車場二十五台（ふるさと館斜前）

山頭火ふるさと館報
第８号
令和４年４月1日発行

編集・発行
一般社団法人
防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
747-0032
山口県防府市宮市町5番13号
電話　0835-28-3107
FAX　0835-28-3113